

## 環文ミニセミナー（第19回）

## 事務局

4月29日(金/祝)開催の、第19回環文ミニセミナーの概要、ディスカッションをご紹介します。

## 第19回 脱成長～あらためて考えねば

講師：十文字 修氏（佐渡島在住）

## 【話題提供】

神奈川県職員退職後、42歳で佐渡島に移住。現在は佐渡にある社会福祉法人に勤務。仕事を通じて佐渡の人々の暮らしを目の当たりにし、日本の地方の現状を痛感している。20代から都会で「環境」をテーマに活動してきたことと、佐渡での暮らしの視点で「脱成長」について考えるようになったが、今日は是非皆さんの意見も伺いたいと考えている。

2021年秋の衆院選では「成長」と「再分配」が争点となったが、「脱成長」という言葉は聞かれなかった。またSDGsでも経済成長は必要とされ、ゴール8（雇用）ではすべての人が「雇用」されることを前提としている。しかし、例えば農業は「雇用」ではなく、むしろ「暮らし方」ではないかと思う。

高度経済成長期に横浜市郊外で育ち、22歳から38歳まで横浜市郊外の里山を守る活動に関わったが、都市で緑地や里山を守るのは限界があった。大都市圏に人が押し寄せ宅地開発が進む現象は、都市だけでは解決できない。そこで、なぜ地方から人が去っていくのか、地方は一体どうなっているかを自ら見たいと考え2002年に佐渡に移住した。

その後、時代の変化と生活地域の違いで自分の考え方も変わってきた。移住した時点で佐渡島民人口は7万人強でまだ社会の体を成していたが、それから20年経った現在は5万人程度まで減少、2045年には3万人程度まで減少する見込み。現時点でも総合病院の閉鎖が続き、島での出産・子育て

も難しくなりつつある。医療崩壊の歯止めがきかなくなると、それが人口減少の新たな原因になり、更にそれが続けば社会が崩壊する。都会で暮らしていた頃は、里山が次々と住宅地に変わる様子を見ていたので「脱成長」という概念に共感していたが、佐渡に来て社会崩壊を目の当たりにすると、やはり経済成長は必要ではと考えた時期もあった。若い世代は都会、島には高齢者だけが取り残される状況では、企業誘致による雇用創出が市役所の仕事となるのもやむなし。このままでは日本の中山間地、離島は金持ちの別荘や変わり者が住む場所になりかねず、日本の「地方」は経済成長に期待してしまいがちになる。しかし佐渡では戦後一貫して少子高齢化が進み、好景気には多くの人々が都会へ。経済成長はむしろ地域の衰退の原因となり、好況や経済成長と、地方が健康で文化的な生活を営むことは逆の関係にあるのではと考えるようになった。

## 【ディスカッション】

十文字からの問い「環境に対して破壊的、収奪的でない経済成長はあり得るのか？」

そもそも経済成長はよくないのだろうか。それとも、中央集中型ではない、地方分散型の経済成長というものがあり得るのだろうか。もしあり得るとして、それは地域や地球環境にとって、破壊的・収奪的なものではない（例：CO<sub>2</sub>排出を減らす）ことが可能なのだろうか？

（参加者からの意見）

○日本の経済構造は中央集中だけでなく地方分散もありえるのではないか。気候

変動や生物多様性の減少から明らかなように、地球の環境容量が満杯なので「成長」は難しく、むしろ「成長」を志向しない生活を見いだす必要がある。「経済成長」とは関係ない、地方分散型のサステナブルな「経済」のやり方はいくらでもあり得るだろう。

○「脱成長」という言葉の明確な定義が必要。経済成長は手段なのに目的になっている。何を以て成長と考えるかを考えなければならない。ブータンは炭素中立を最初に宣言した国で、そういう成長があることを示した。GNH(国民総幸福量)とは、それを維持するための国の目的で、政府予算と連動させ、70万国民の内3000人に5年毎に状況聴取している。成長させたいことは全体の幸福を増やし、安全、安心で充実した生活を皆が送ることが指標となっている。「成長」は必要だが、成長させるべきものは全体の幸福。何を成長させるかの論議が最初にあるべき。経済を回すとモノや自然への負担なしに成長することが大事。文化や教育の向上を重視すべきではないか。

○世を活発にし民を豊かにすることが経済の目的。「成長」は、貧しい人を豊かにするために経済全体のパイを大きくする政策論。貧しい人を豊かにするもう一つの方法は分配の見直しだが、今の政治では手が付けにくい。今のやり方でいけば「成長」は「拡大」と同義になり、この路線では成長の反対語は「停滞」になる。

十文字：「脱成長」という時、我々の間では「拡大」ではないやり方を意味していると考えて良いと思うが、こういう話は仲間内の話になっていることが問題。我々の間での合意より、社会との関わりをどうできるかが課題。論理や言葉の使

い方を外に向かって発信できるような言葉の強さを持つことが大事ではないか。

十文字の考え「脱成長が必要だとして、にも関わらず、脱成長論が寂れてしまったのは何故か？」

a.格差・貧困・地方の疲弊の進行による経済成長待望が一般的になってきている。

b.「脱成長」が「脱炭素」という言葉に置き代わってしまった。両方とも環境を意識した言葉だが、人間生活の充実や社会の公正などを含意していた「脱成長」が、地球環境保全のための「脱炭素」という概念に覆われた。

c.「地球の有限さによる制約のススめ＝ガマンとオドシの論」の逆効果で、どうせ先行き暗いなら「今だけ金だけ自分だけ」に走ってしまう。

d.無理やり「明るい脱成長」のイメージを作っている。本心は資源を使った便利な暮らしを求めているのに、有限な地球では我慢が必要で、それなのに「脱成長」に方向転換した方が幸せになれる、という論理展開は浅く見える。

問「これまでの歴史を踏まえて、脱成長論を再構築できないか？」

地球の有限さから来る「脱成長論」だけでない、もう一つの「脱成長論」があるとすれば、80年代に言われた、地域社会の持続や自治、民主主義、公正、協同など、いわば「生の充実」の脈絡で望まれる「脱成長」ではないか。自分のあり方の充実のために「脱成長」を選択するという道もあるだろう。佐渡に移住する若者は、地球環境を考えて「半農半X」を実践しているわけではなく、自分達の暮らしを充実させることが大事だと考えている。そうした生き方を「脱成長」

への回路として外に向かって発信するため、外でも通用するような言葉として鍛えていく必要があるだろう。

80年代にイヴァン・イリッチは、限度のないエネルギー消費により民主主義が崩壊すると述べた。室田武も技術偏重が人間生活のベースである水と土の喪失に繋がると警鐘を鳴らした。しかしその後、地球環境問題への対応として炭素放出抑制だけに傾き、地域社会や働き方を脱成長と結びつける語り口が影を潜めた。今後、そうしたことと脱成長と結びつける論理を社会に定着させ政治に反映していく必要がある。そのため、未来への必要条件である「地球の有限性を理由とした脱成長論」に、「生の充実（個・社会）を前面に掲げた脱成長論」を加える必要があろう。

（参加者から意見）

- 環境教育の仲間では後者の考え方が主流だが、大きな声に出さない傾向がある。
- 有限論を訴え続けてきたが、その議論は受け入れられてこなかった。
- 佐渡に移住するのは地球環境保全などの社会的正義感からではなく、楽しく幸せな生活を求めているのでは。個人的目的で移住しているから、社会に訴えることはしない。環境活動を義務的ではなく、好みの問題に転換すれば社会に広がるのでは。
- 日本人は政治的な活動を嫌う傾向があるとされており、NPO活動にイデオロギー的な臭いを感じて避けるのではないか。
- 「半農半X」の生き方があることを具体的に知らない人が多いのでは。多様な生き方をモデルケースとして宣伝していく必要があるのでは。
- 移住の選択肢について具体的な知識がないのは事実。十文字さんのような生活が理想と思うが、現在の社会で子育てしな

がら生活するという現実を踏まえると、二の足を踏む人が多いのでは。

十文字：中山間地や離島は普通の人やすんまり住める場所ではなくなっている。その理由を問い直すべきだが、社会の仕組みが個人の幸せまで連動しているという、大きな枠組みで物事を捉える視点を持たない人が多すぎる。例えば、佐渡で半農半Xをやっている若者は反原発の集会には来ない。根底に政治への忌避感あるのは事実。佐渡までやってきた若者の心情をくみ取るような言葉のやり取りが全くない政治には期待できる足場がないので、政治や社会に働きかけようとせず、自分の生活の満足に立てこもるしかない。これでは彼等の求める生活の土台が崩れていく事態に対して無力だ。一般の人びとに響く言葉の使い方を考えるべきであり、「おどしと我慢」に加え、もう一つの生き方、「脱成長論」を言語化し、論理化していく必要がある。教育も含めて、我々先行世代は、そうした生き方を整理し、伝わる筋道を作らなければならないだろう。この手の議論は、考えなければならない、という点で合意はするものの、そこで終わりがちである。

事務局から、この議論を継続していく提案があり、実際にミニセミナーで議論していく予定である。（文責：事務局）

#### 「みんなのページ」へのご投稿をお待ちしています

「みんなのページ」は会員のみなさまの交流の場です。環境や暮らしについて思うこと、ミニセミナーや本の感想等テーマは問いません。ご投稿をお待ちしています。

メール (kaihou@kanbun.org) または郵送でお送りください。

